



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第61回日本手外科学会 学術集会開催にあたって

第61回日本手外科学会学術集会
会長 稲垣克記
(昭和大学医学部整形外科学講座)

目次

- 第61回日本手外科学会学術集会開催にあたって
- JSSH-ASSH Traveling fellow 報告記
- JSSH-ASSH Traveling fellow 報告記
- 手外科温故知新IV: 手の先天異常は神の不完作か配剤か
- バトンリレー (第2回)
- 第3回カダバーワークショップ参加記
- 委員会報告
- お知らせ
- 編集後記

この度、第61回日本手外科学会を平成30年4月26日(木)・27日(金)に、東京の京王プラザホテルで開催させていただくことを誠に光栄に存じます。本学会は昨年還暦を迎え、今回は第61回の学術集会となります。

日本手外科学会学術集会は国際的にも最も専門性の高いレベルを日本が行っている数少ない学術組織である事、そしてわれわれがそのメンバーである事を大変誇りに思います。近年の本学会の発展は演題数をみても増加の一途であり、経験あるExpertの先生から若い先生まで多くの方が加わり益々活気のある学会となっています。

これは近年、急速に進歩した医学のなかでも特に、手と脳、上肢のバイオメカニクス、上肢の人工関節・人工靭帯の応用、マイクロサージャリー(皮弁、血管柄付き骨移植術)、手・肘のスポーツ外傷・障害、そして橈骨遠位端骨折、舟状骨骨折をはじめとした骨接合インプラントの開発、手関節鏡視下手術の進歩、前腕・肘不安定症などの科学の発展によるところが大きいかと思います。これらのトピックスを中心に今回は米国から4名、ヨーロッパから3名、アジアから1名の海外招待者にご講演と国際シンポジウムをお願いいたしました。

本学会のテーマは「サイエンスとアートの調和」とさせていただきます。私が33年間、手の外科をさせていただき感じた事は、手の外科の醍醐味はサイエンスとアートをいかに外科医自身が自分の脳と心のなかでバランスよく理解し調和してゆくとことろだと思います。これらの素晴らしい前進すべき点と問題点をいくつかの主題とシンポジウム、パネルディスカッションとして動画も交えてディスカッションしてゆきたいと考えています。

東京の地で教職員一同が心を込めて皆様をお招きしたいと思います。多くの先生のご参加を心からお待ち申し上げます。

JSSH-ASSH Traveling fellow報告記

岡 久仁洋

大阪大学大学院医学系研究科
器官制御外科学・保健センター

2017年度のJSSH-ASSH Traveling Fellowとして8月28日から9月15日の日程で、東海大学整形外科の高木岳彦先生とともに米国を訪問させていただきました。ASSHが指定した4施設 (Hospital for Special Surgery、Beth Israel Deaconess Medical Center、Curtis National Hand Center、University of Michigan) をそれぞれ2日間訪問し、1週間ASSHに参加する3週間のスケジュールでした。また、プログラムとは別にMassachusetts General Hospital、Stanford Universityに訪問する機会が得られました。留学経験のない私にとって本プログラムは世界的な視野を広げることができる貴重な機会であり、期待に胸を躍らせて日本を出発しました。簡単ではありますが、報告させていただきます。

【Hospital for Special Surgery (N.Y.)】: 8/28-29

外傷、拘縮、靭帯再建、腕神経叢など様々な手術を見ることができました。診察の合間に、Dr. Carlsonから舟状骨偽関節のバイオメカに関する紹介があり、新しい知見を聞くことができ今後の研究活動にも大変役立つ訪問となりました。



手術室にて。 Dr. Weiland (左写真)、Dr. Hotchkiss (右写真)

【Massachusetts General Hospital (Boston)】: 8/30、9/2

移動日を利用して、Dr. JupiterとDr. Neal Chenを訪問しました。Dr. Nealに肘関節外傷に対する研究内容を拝聴し、施設の案内をしていただきました。外来診察ではScratch Collapse Test (不勉強でしりませんでした) を教えてもらい感銘を受け、現在、末梢神経障害のスクリーニングとして使用しています。



筆者 (左) Dr. Neal Chen (右)

【Beth Israel Deaconess Medical Center (Boston)】: 8/31-9/1

初日はカンファレンスに出席後、手術見学をしました。カンファレンスでは1例1例、時間をかけレジデントの教育も含めて活発にdiscussionされていました。また、研究内容を発表する時間を設けてもらい、意見交換することができ、大変貴重な機会となりました。HostのDr. Rozentalは、アカデミックであり手術も手際よく、またホスピタリティーにあふれる素晴らしい指導者でした。



Dr. Rozental (右)

【Stanford University (CA)】 9/5

京都大学の貝澤幸俊先生、山形大学の丸山真博先生のお世話になり、広大なキャンパスと研究施設を案内していただきました。研究の規模、資金力に圧倒されましたが、世界的研究を肌で感じることができました。



左から丸山先生、高木先生、筆者、貝澤先生

【ASSH】 9/7-10

各国のfellowとASSHのcommittee memberが参加するBunnel luncheonに出席しました。Fellowの数が増えたため今回は自己紹介のスピーチのみでしたが、同世代の研究者と著名な先生方とテーブルを囲んで意見交換ができる貴重な経験となりました。



Dr. Light、Dr. Bishopと各国のfellowたち

【Curtis National Hand Center (Baltimore)】 9/11-12

Cadaver実習はDr. Higginsが上肢一本を使って、血管、神経の走行を詳しく解説されていました。充実した教育と臨床のシステムに感心させられました。手術はDr. Higginsの舟状骨偽関節に対して近位骨片を置換するmedial femoral condyle flapが印象的でした。



右より筆者、Dr. Cansü（トルコ）、高木先生Dr. Schmidle（オーストリア）

【University of Michigan (Ann Arbor)】 9/13-15

Dr. Kevin Chungを訪問しました。プログラムの前日から症例検討、研究内容のプレゼンテーションの時間をつくっていただきました。臨床における問題点、医療経済、研究の方法論など厳しい意見もいただき、活発な議論を行うことができました。



Dr. Kevin Chung（中央）

本プログラムにより全世界のfellowと米国の先生方と交流できたことが何よりの財産となりました。今回、貴重な機会を与えていただきました矢島弘嗣日本手外科学会理事長、国際委員会の柿木良介担当理事、担当委員の諸先生方、訪問先でお世話になった貝澤幸俊先生、丸山真博先生、米田英正先生、推薦していただいた大阪大学整形外科吉川秀樹教授、村瀬剛准教授、長旅をとともに過ごした高木岳彦先生、赤ん坊とともに日本で待っていてくれた妻に心より感謝申し上げます。



JSSH-ASSH Traveling fellow報告記



高木 岳彦

東海大学医学部外科学系整形外科学

2017年8月28日～9月15日までJSSH-ASSH Traveling fellowに大阪大学の岡久仁洋先生と参加させて頂きました。ASSHのInternational relations committeeの方針で今回は18人のフェローが5グループに分かれて指定の施設を訪問しました。フェローは原則各国1名ずつですが、日本からは岡先生と私2名です。なお日本人がUniversity of Michiganを回ることはKevin Chung先生ご自身からも“mandatory”と言われていて、提示された5つの旅程のうちMichiganが入っている2つから希望を出すようになります。

その結果、岡先生のほかSchmidle先生(オーストリア)、Cansü先生(トルコ)と4人で各施設を回ることになりましたが、他の国のフェローと一緒に回れたことは想像以上に楽しく有意義なものでした。

Hospital for Special Surgery, New York, NY: 8/28-29

Hotchkiss先生、Weiland先生の手術、Carlson先生の外来見学をさせてもらいました。Carlson先生は橈骨遠位の海綿骨移植で舟状骨偽関節を治せると力説していたのが印象的でした。2日目はWolfe先生が腕神経叢損傷の各種神経移行術を施行していましたが次の移動への飛行機の時間が来てしまい途中までしか見学出来なかったのが残念でした。

Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, MA: 8/31-9/1

Rozental先生、Iorio先生という若手2名のスタッフのチーム構成です。ここで現在取り組んでいる筋電義手への神経移行術のお話しをさせて頂く機会がありましたが、違う視点から質問を頂き勉強になりました。その後近くのpubでスタッフ、フェローで食事に行きましたが、若手が多いこともあり話も弾み、調子に乗ってつい飲み過ぎてしまいました。

ASSH Annual Meeting, San Francisco, CA: 9/6-9/9

いつも乍らにPrecourseから大変勉強になり、刺激的な学会でした。今回はASSH fellowとして参加しましたが、18人のフェローが一堂に会し、彼らと夜通し飲みに行く機会があり、各国フェローとの仲間意識は強くなりました。後半1週間は彼らと各々の訪問施設の情報交換ができました。

Curtis Hand Center, Baltimore, MD: 9/11-12

チーフのHiggins先生のほか、年長の手外科スタッフの先生がこの病院には何人もいて彼らの手術も見学しました。ここにいた親日家のフェローが飲み連れて行ってくれましたが、多くのスタッフの先生の中でHiggins先生がチーフになっているのは対外的にも活躍されていて、信頼も厚いからだろうと話してくれました。我々にも非常に紳士的な先生でした。

舟状骨偽関節や無腐性壊死に対し大腿骨内側顆の骨軟骨移植を行っている先生ですが、たまたまその手術を見学する機会がありました。

University of Michigan, Ann Arbor, MI: 9/13-15

予定は9/14-15でしたが、Kevin Chung先生が9/15不在となったため、9/13夕方に集合し各フェローのプレゼン、質疑応答が夜まで行われ、翌朝はChung先生の試問形式のCase lectureその後手術見学となりました。これまで訪問された先生も書かれているように大変教育熱心で、私のプレゼンに対しても建設的な意見を頂きました。

9/14午後からは同じMichigan大学の形成外科Cederna先生のもとにWashington UniversityよりAmy Moore先生がたまたま来訪されていて、神経移行術のcadaverのデモ、講演を聴かせて頂きました。さらに翌9/15朝にはCederna先生のlab meetingに参加させて頂く機会がありました。Cederna先生が取り組まれているRPNI(Regenerative Peripheral Nerve Interface)の話は興味深く、帰国後も情報交換を続けていこうという話になりました。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えて下さいました日本手外科学会理事長矢島弘嗣先生、国際委員会担当理事柿木良介先生、同委員長和田卓郎先生はじめ、日本手外科学会、米国手外科学会の担当の諸先生方、長期出張を快く送り出して下さった東海大学の渡辺雅彦教授、留守中にご迷惑をおかけした教室の先生方にはこの場を借りて深謝致します。また長旅を共にした岡久仁洋先生に心より感謝申し上げます。

今回築いた交友関係を大切に、今後も精進したいと思います。



Beth Israel Deaconess Medical Center (BIDMC)近くのpubにて。Rozental先生（右から2番目）の招待。左端私の左隣がCansu先生（トルコ）、右端はSchmidle先生（オーストリア）、左側奥の岡先生と4人で3週間回りました。



ASSHのInternational Receptionにて。各国のトラベリングフェローと。



Curtis Hand Centerにて。Higgins先生（中央）と。



University of Michigan. Kevin Chung先生（右端）のお部屋でCase lecture。



University of Michigan. Moore先生（右から14人目）の講演の後で。Cederna先生（右から16人目）のフェロー、ラボのメンバーと。留学中の名古屋大学整形外科の米田英正先生（左端）には滞在中大変お世話になりました。

手外科温故知新IV: 手の先天異常は神の不完作か配剤か

上羽康夫

日手会名誉会員・医療法人白菊会理事長

手の先天異常の歴史は古く、人類発生当初から見られたものであろうし、多分非常に稀なものでもなかったであろう。釈迦の手には合指が在ったと云い伝えられており、現在に至るまで仏像の手にはhigh interdigital websが彫刻されている。長い歴史を経ながらも先天奇形手の科学研究は比較的新しく、その研究には我国も大きく貢献している。

1. 原因の追究：手の先天奇形の発生原因として①遺伝子の異常変化によるもの、②遺伝子異常and/or胎児への環境因子（例えば、ウイルス感染、放射線、薬剤、化学物質、外力など）によるもの、③胎児期の環境異常で起るものなどが知られている。①に属するHolt-Oram症候群やUlnar mammary症候群などはTBX遺伝子変化によって起こる。②に属する奇形手で最も多く見られる多指症、合指症、裂手症では両手に発生する場合は遺伝子異常が関与するが、片手奇形があっても他部に先天異常が無ければ環境因子によるものが多いと考えられている。③に属するのは絞扼輪症候群などである
2. 組織学的研究：胎児期における手の形成過程はCarnegie Stageとして知られている。第二次世界大戦直後の我国ではbaby boomが起り、急激な人口増加が懸念された。少子高齢化に悩む現代日本とは逆に当時は墮胎が多く、その胎児標本が京大附属先天異常標本解析センターに保存された。それを用いて、安田らはapoptosisによる指形成過程と異常発生時期を理解し易くした¹⁾。Carnegie stage 23（排卵後52日目）の胎児手標本ではすでに中手骨が手横アーチを形成しているのが分かる（図1）。須藤は血管造影により先天奇形手の動脈走行を明確にし、手術法開発に貢献した（図2-A, B）。²⁾



図1：
京都大学附属先天異常標本センター（標本番号：#4361-70）
中手横断切片 Carnegie stage 23（排卵後52日目）：
総ての中手骨は既にあり、手横アーチを形成している。



図2A：内反手における動脈の走行



図2B：母指形成不全における動脈の走行

3. 分類：先天奇形手の系統的分類法はSwanson ABが先ず提唱したが³⁾、三浦、荻野らは多数のX線像の解析からcleft hand syndrome groupを提唱し^{4, 5)}、骨性合指症や中指多指症から裂手症に至る過程様式を提示した(図3)。今日では国際的分類法として広く受け入れられている。

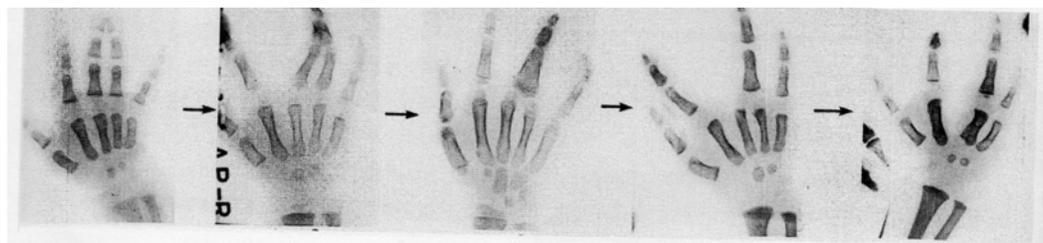


図3：骨性合指症から裂手症への過程

(荻野利彦：先天異常。In.石井清一編：図説 手の臨床。Medical View社、2003,p.217より)。

4. 治療：手術によって先天奇形手を完全な正常手に復元するのは現状では不可能である。最も簡単な母指多指症type IIの手術を行っても、術後に末節の太さ・長さの異常、あるいは関節変形などの形態異常が残るからである。術直後は患者の両親・祖父母たちが喜んでくれても、私自身が満足したことは無い。乳幼児の患者はその時には何も言わなくても、数年後に友達の手指と比較して異常に気が付き、悩むことがあるかも知れぬと心配するからだ。神様が「私が造った手をお前たち人間が造り直せる筈がないではないか」と笑って居られるかもしれぬ。1971年Buck-Gramckoは先天母指欠損に対する示指母指化術pollicizationを発表した⁶⁾。その術式は皮切、筋腱移行、骨切り術を合理的に組み合わせ、術後の母指形態と機能を非常に改善した。丁度その頃、裂手をもつ子を産んだ母親が裂手の醜さに嫌悪をおぼえ、我が子を愛せなくなり、養育を拒否する例を知った(図4-A)。典型裂手の醜形は生後できるだけ早期に、しかも成長後も手に機能障害をもたらさない手術が必須だと感じた。そこで、典型裂手術では、(1) 3つの皮弁を作成し、示指・環指間の裂隙を閉鎖すると同時に母指・示指間の指間腔を広げ、手背の皮膚縫合線は可及的に横方向に近づくよう配慮した(図4-B)。(2) 示指列の尺側移行時には、成長軟骨の無い第2中手骨々底部に横骨切りを行い、残存第3中手骨または有頭骨遠位端に接合する。移行した示指列の長さと同外角度を調整し、横アーチ中央位に移動した(図4-C)。(3) 更に、移行示指列と隣接する環指列とが協調して働けるように指伸筋腱や骨間筋腱の位置修正術を行い、



図4A：典型裂手（術前）：手の中央部に深い亀裂あり、中指は欠如。



図4B：術式①皮弁作成：皮弁移行により手中央部の裂隙を閉鎖し、同時に母指・示指間腔を広げる。手背の皮膚縫合線は横方向にする（術中写真）。

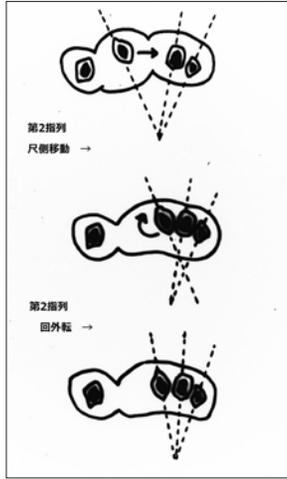


図4C：術式②示指列移行：第2中手列移行時には第2中手骨底部の骨切り後に尺側に移動すると同時に回外回転させる必要がある。

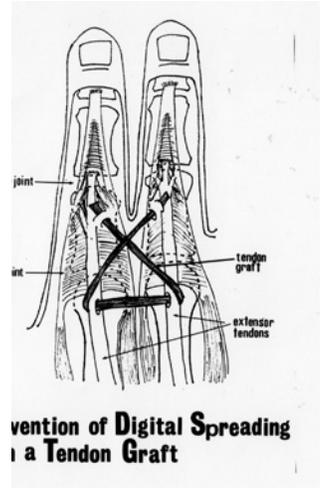


図4D：術式③ 指伸筋腱の走行保持：指運動時でも指伸筋腱を中手骨々頭背側・中央部に保持する。



図4E：術後の指伸展：手背の癒痕は目立たない。母指腔と示指・環指腔が保たれている。



図4F：術後の指屈曲：示指列の回外矯正により示指・環指の指尖重なり合いは無い。



図4G：術後X線像：移行した指列が予定した位置に留まり、移行した中手骨も正常に成長している。

指伸展時には適当な指間腔ができ、指屈曲時には指先が重ならないよう調節した(図4-D)。術後でも指数は1本足りないが、手の外見は改善し、指の機能も良くなり、X線像でも中指骨の成長が認められる(図4-E, F, G)⁷⁾。更なる詳細は成書を参照してください^{8, 9)}。手外科医にとって此の手術は決して難しいものではないが、整形外科と形成外科の基本的な知識と技術が必要である。ニューヨークで手外科を研修した私に手外科における整形外科の基本を教えて下さったDr. RE Carroll, Dr. LH Schneider、ならびに形成外科の基本を教えて下さったDr. F Symons, Dr. AL Garnsに改めて深甚の謝意を表す。

今年是我国の手外科専門医制度が発足する記念すべき年である。先天奇形手の治療には整形外科・形成外科の両域を習得する必要がある。更に胎児手術も習得すべき時代が来るかも知れない。1983年米国ボストン市で開催された第2回国際手外科学会(IFSSH)特別講演でHarvard大学Prof. Richard Smithが「先天奇形手の手術は胎児期に行わねばならない。胎児期なら術後瘢痕は生じないからだ」と熱っぽく語られたのが、今も私の耳深くに残っている。当時は夢物語としか響かなかった話であったが、四半世紀経た現在は正にそれに応え得る知識と技術が備わったのではなかろうか。

5. 社会的影響：先天奇形手に関する重要な課題をもう一つ述べておきたい。それは家族や社会の意識の問題である。先天奇形手を持った子が生まれた時、現代でも親や祖父母の嘆きは極めて大きい。だが、現代では術後の手機能は一般的に良く保たれ、精神発達も良好で、社会人として独立している場合が多い。個人的経験では、奇形手を持って生まれた子供たちは優しく、社会に出てからも人の役に立つ職業に就いている。精神科医に尋ねても、手に障害を持っている人には精神病患者は少なく、犯罪者も少ないようだとの意見である。手術をしてほしいと悲嘆にくれて来る父母・祖父母には「残念ながらこの子の手は普通の人の手とは異なりますが、必ず優しく強い精神力を持つ人に育ちますよ！」との一言を付け加えて、励ます。厳密な調査をしたことはないが、幸いにも其の後ご家族から「あの時の嘘つき野郎」と叱責されたことは一度もない。もし神が奇形手を造られたとすれば、単なる神の摂理や悪戯ではなく、もっと深い意味があるように思われる。

文献

- 1) 安田峯生：手の発生と奇形の成り立ちについて。整形外科27:1197-1203,1976.
- 2) 須藤容章：先天奇形手における血管の走行に関する研究—その発生意義について。日整会誌53：1627-1640,1079.
- 3) Swanson AB: A Classification for congenital limb malformation. J Hand Surg 1:8-22,1976.
- 4) Miura T: Clinical differences between typical and atypical cleft hand. J hand Surg 9-B:311-315,1984.
- 5) Ogino T: Teratogenic relation between central polydactyly, osseous syndactyly and cleft hand. J Hand Surg 15-B:201-209,1990.
- 6) Buck-Gramcko D: Pollizisation des Zeigefingers bei Aplasie und Hypoplasie des Daumens. Handchirurgie 3:45-59, 1971.
- 7) Ueba Y: Plastic surgery for the cleft hand. J Hand Surg 6:557-560, 1981.
- 8) Buck-Gramcko D: Congenital Malformations of the Hand and Forearm. Churchill-Livingstone, London, 1998.
- 9) Wood VE: The cleft hand (central deficiencies) . In: Operative Hand Surgery 3rd Ed. (edited by Green DP) , pp.274-288, Churchill-Livingstone, New York, 1993.

手外科バトンリレー (第2回) ～～手外科のときめき～～

矢部 裕

慶應義塾大学 名誉教授

1. 恩師津下健哉先生

昭和33年(1958年)、岩原教授の臨床講義に憧れて、整形外科に入り、ドイツ風の整形外科を仕込まれ、学んできた。然し何となく堅苦しく、戦後でもあり、自由奔放なアメリカ風の手の外科は輝いて見えた。日手会に出席してみると、米国留学から帰国した新潟大学の田島達也先生と岡山大学の津下健哉先生の手外科に対する高い識見とお二人の手術成績は群を抜いていた。

昭和37年第7回日手会を岡山大学の児玉教授が主催された。日手会の一環として、津下先生によるライ性麻痺手の機能再建手術の供覧が大島青松園(長嶋愛生園の隣のライ療養所)でなされ、そのメス捌きに見惚れた。

昭和38年、岡山県の長嶋愛生園へ出張を命じられ、松が明けて赴いた。全く期を同じくして、生涯の友となった橋爪長三先生が信州大学から着任されておられた。二人して毎週金曜日岡山大学で憧れの津下先生の手術を見学し、教をいただいた。

津下先生の手術はatraumaticで流れる様であった。一定のリズムがあり、見ていても気持ちがよい。特にinstrument tieは術野が細部に亘ってよく見え、見学している私は大学ノートに線画とメモを取らしていただいた。この大学ノートは2冊となり、私の宝となった。手術が終わると、津下



恩師故津下健哉名誉教授(前列中央)を囲んで、手外科のすばらしき友たちと。(2003年5月)

先生も表情が緩み、私たちの方を向いて、なにか質問があればと無言で問いかける。私たちは軽く頭を下げ、無言で有難うございましたと返した。更に、手術記事や写真等のデータの整理、患者さんとその家族へのソフトな接し方、説明の仕方まで一年三カ月に亘って学ばせていただいた。

慶應に帰って、津下先生の手の外科の実際はまだ発刊前だったので、手の手術で分からないときは、この大学ノートを紐解いた。その後、50年にも亘って、津下先生に手外科の芸術的技法と心を教えていただいた。昭和38年、希望に燃えて津下先生の門をたたき、夢中になって手外科を学んだ私の青春時代を振り返ると、いまでも手外科へのときめきを感じる。

今は亡き恩師津下先生有難うございました。

2. Campbell Clinicへの留学

しばらく慶應で症例を重ねたあと、私は昭和44年(1969)秋に米国のCampbell ClinicのProf. Lee Milfordのもとへ留学した。そこで先に留学していた慈恵医大の室田先生との出会いがあった。Campbell Clinicでの6カ月、特に室田先生と過ごした3カ月は、教職にあって常に駆け足をしてきた私にとっては人生のオアシスでもあった。

Milford先生は津下先生以上に几帳面だった。手術はCampbellのOperative Orthopaedicsに書かれている彼のシェーマ通りに進行した。手外科に加えて、Campbell Clinicでは、Memphisの片田舎でなぜあの素晴らしい整形外科の教科書Operative Orthopaedicsが作られたのかということ、米国の医療の仕組み、世界の大きさを勉強させていただいた。またMilford先生の紹介で、Riordan, Boyes, Flatt, Carroll, Curtis, Brand, Enna, Linscheid, Dobyns先生等米国手の外科の一流の先生方を訪問し、胸はときめいた。

3. 素晴らしき仲間たち

慶應に帰り、症例を重ね、基礎的な研究も含め、日手会でその成果を発表する傍ら、室田先生、東大(順天堂)の山内先生、日医の池谷先生らと東京手の外科症例検討会を持った。知識豊富でアメリカカラッパの山内先生を中心として、検討会は活発に、和やかに進んだ。これが後の東日本手外科研究会に発展した。

私は昭和48年名古屋保健衛生大学(藤田学園)へ赴任した。そこでも東海手の外科クリニカルカンファレンスが開催されて、名古屋大学の三浦先生、三重の藤沢先生、岐阜大学の浅井先生、掖済会病院の木野先生達と楽しい交流があった。これも中部日本手外科研究会の礎石となった。

そして日手会では、鶴岡の諸橋先生、山形大学の渡辺先生、岩手大学の阿部先生、京都大学の上羽先生、奈良医大の玉井先生、広島大学の生田先生、琉球大学の茨木先生たちと学問だけでなく、人間的なお付き合いもいただいた。

日本手の外科学会における黎明期は、津下健哉先生と田島達也先生を中心としての時代であり、私たちは教わりつつ勉強させていただいた。続いての成長期、第2世代はほぼ同年配である私たちの時代であったと考えている。今は成熟期、第3世代から第4世代に移行しつつあるのだろうか。種々の学会の会長招宴で、年齢の近い我らは同じテーブルに席を取り、杯を重ねつつ、素晴らしかったときめきの手外科を語り合う。

4. 手外科のときめき

私自身大学病院で手外科の診療をしているときは充実していて楽しかった。特に藤田学園では、思う存分自分の好きに手術が出来て、幸せだった。しかし、時には治療の困難な症例にも接し、原因の良く分からない、治療の結果が思わしくない等、種々の不合理な問題点に突き当たった。何とかブレイクスルー出来ないものかと常に頭の片隅において考えていると、ある時、ふとアイデアが浮かび、解決策につながることもある。その実績をまとめ、新知見の結果を学会で発表した。手外科のときめきを感じた時であった。

新知見の3-4は、基礎的研究にも繋がり、更に臨床にもヒードバックされている。

5. 若い先生方へ

- まず学び、腕を磨くこと；手外科の師・オーブンから、教科書、専門書、手術書から、学会、研究会から、患者さん一例一例から教わり、学び、腕を磨いてください。
- データの整理と保管；患者さんの臨床データや写真、研究業績の処理・保管はコンピュータで簡単にできる時代になりました。しかし、自らデータを見ながら整理し、頭の中でまとめ考えていってください。
- 留学の奨め；手外科に加えて、また別の視野が広がり、人生が豊かになります。
- 手外科の友；学会、研究会等で、手外科を志す同好の志と学閥を超えて真実を語りあい、交流してください。時とともに素晴らしい仲間になります。
- 新知見への挑戦；まず不合理な問題点を見出すことです。それには一例一例の患者さんから学び取る旺盛な探求心が求められます。そして見出された問題点を解決すべく、常に考えながら学び、工夫を凝らしていると、ある時ふとnew ideaが浮かび、解決の糸口を見つけることが出来ます。そして挑戦を続け、新知見として纏め、発表することにより皆さんの手外科は美しくときめきます。



Milford先生御夫妻を囲んで
右から山内裕雄先生御夫妻、室田景久先生御令室様、Milford先生御夫妻、矢部裕夫妻
(1987年4月 箱根オーミラドにて)

第3回

カダバーワークショップ参加記 【 関節鏡コース 】

深 井 敦 大

高月整形外科

2017年9月7日、8日に札幌医科大学解剖学実習室において開催された第3回カダバーワークショップに参加させて頂きました。コース初日は関節鏡及び皮弁についての講義を受け、2日目の朝、黙祷の後ワークショップが開始されました。御遺体はthiel法という方法で処理がされておりました。私が学生時代に系統解剖をしたのは10年以上前になりますが、率直に当時の献体よりも当ワークショップのご遺体は比較的生体に近い印象でした。手関節鏡コースは1手に3人の組み合わせで計3班。私の班は小郡第一病院の坂本相哲先生にご指導頂き手関節鏡、CM関節鏡、鏡視下TFCC縫合の練習などをさせて頂き、その後自由解剖として舟状骨や手根管などを展開、形態の確認などをしました。SL靭帯損傷がある御遺体で、また私自身が慣れていない事もあり簡単ではありませんでしたが、本トレーニングが大変有意義であった事は言うまでもありません。また、御献体頂いた方の御意向に感謝すると共に、医師としての責任を改めて感じ、身の引き締まる思いでもありました。



『〇〇の手術ができるか？』

私見ではありますが、自信を持って『〇〇の手術ができる』と言えるには、知識、理論を理解し、指導医立ち合いの基に実践、反復し、自分が1人でやり切れる事を確認する必要があると思います。現実には試行錯誤の過程で上達していく側面もあるのではないのでしょうか。一方で失敗は許されない医療、特に部分麻酔が比較的多い手外科領域においてはon the job trainingには必然と限界があるように思います。以上の意味でカダバワークショップは非常に有意義なものです。一方でまた、一度経験したのみでスキルを即臨床で実践できる訳でもないと思います。手術のスキルアップを目指す者として忌憚なく言わせて頂ければ、理想的なトレーニングは疑問が生じた際に、距離的、費用的にアクセスしやすく、何度も行えるという事ではないのでしょうか。その事によって1回のトレーニングがさらに生きてくるのだと思います。私の中では、カダバトレーニングといえは海外においてタイトスケジュールで開催され、渡航費も含めて高額な費用を要するイメージがありますが、当ワークショップは国内開催であり、また費用も比較的安価(7万円)である点は貴重かと存じます。日本においても2013年に『臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン』が一般公開されて以降、カダバトレーニングの普及が図られていると伺っておりますが、ガイドラインに特に有用と記載される『複雑な解剖学的構造を有する部位』に手外科領域はまさに該当するのではないのでしょうか。僭越ながらカダバトレーニングのさらなる社会的認知、充実と手外科医を始めとした外科医のスキルアップの好循環を期待したいと存じます。

最後になりましたが、今回のワークショップを開催頂きました手外科学会教育委員会の先生方、御協力頂きました札幌医科大学整形外科並びに解剖学講座の先生方、参加推薦を頂きました四谷メディカルキューブの平瀬雄一先生、ご指導頂きました小郡第一病院の坂本相哲先生、参加のおり休暇を頂きました高月整形外科病院のスタッフの方々、御献体頂きました患者さん、御協力頂きました全ての方にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



第3回

カダバーワークショップ参加記 【皮弁コース】

大野 健太郎

札幌徳洲会病院

この度第3回日本手外科学会カダバーワークショップ(皮弁コース)に参加させていただきました。私は形成外科医としての参加なのですが、豪華な講師陣の下でcadaverを用いて皮弁の実践ができる貴重な経験でしたので報告させていただきます。

2017年9月7日(木)、8日(金)の2日間、場所は札幌医科大学医学部解剖学実習室。初日はオリエンテーション、講義などの座学を経た後にcadaverの血管へのマイクロフィルを注入し翌日の準備を行いました。皮弁コース参加者は総勢28名。整形外科23名、形成外科5名、1体のcadaverに対し片側ごとに1グループ4人が割り当てられました。

2日目は朝から皮弁挙上開始。基本的な皮弁と応用的な皮弁といったテーマもありましたが、基本的にどの皮弁かは各グループ内で相談しあえば自由に行ってよい環境で、それぞれ自分のやりたい皮弁にチャレンジしました。実習中は皮弁挙上法のビデオが流れているのでそれを見つつ、講師陣による実践のコツを聞きながら皮弁挙上の練習ができるというありがたい環境の中、ほぼ丸一日皮弁挙上の手技に没頭していました。集中していたからか思いのほか時間が経つのが早かったです。今回のコースで良かったと感じたことの一つに、マイクロフィルによる穿通血管の可視化があります。通常のcadaverだと有名血管などは目視できますが、穿通動脈は見えにくく、曖昧なままの挙上練習になりがちです。今回は細かな血管まで(指動脈の横連合枝まで見えました)観察できるというのは非常に勉強になりました。

全国各地からのflap surgeonを目指す人、さらなる手技習得を目指す人、さまざまな立場での参加者たちの集まりというのは、実技の面だけでなくモチベーションを高めるという意味でも非常に有意義な意味を持つと思います。flapに興味がある人はぜひ参加されることをお勧めします。





委員会報告



財務委員会

委員長 西脇正夫

平成29年度財務委員会のメンバーは、担当理事に三上容司先生、委員に内山茂晴先生、垣淵正男先生、楠瀬浩一先生、中道健一先生、山本真一先生(五十音順)と委員長に西脇正夫で構成されています。外部アドバイザーは、小川正則公認会計士から紙透大公認会計士に交代となり、新たに税理士として長尾謙太税理士が加わりました。

財務委員会の業務は、日本手外科学会の毎年の収支決算と予算について審議して理事会に報告するとともに長期的な財政計画についても審議することや、財務に関して理事会からの諮問に応じ、あるいは理事会に意見を述べることです。

平成29年度財務委員会は、第1回を3月14日、第2回を7月18日、第3回を12月4日に東京都千代田区麹町のコングレ東京本社内の会議室で開催し、対面で参加できない先生方はwebで参加しました。

第1回では平成28年度収支決算と平成29年度収支予算案を理事会に提出し、4月26日の代議員会で承認されました。平成28年度の収支決算は、収入が会費収入、事業収入、専門医審査収入、寄付金の増加により予算より約570万円の増収となり、支出は専門医関連を中心に執行されないものがあったため減少して予算より約1250万円減少になり、収支としては約1440万円の黒字となりました。平成29年度収支予算案は例年とほぼ同様であり、収入は約6550万円(会費収入約4050万円、研修会などの事業収入約1240万円、審査料約1260万円等)、支出は事業費約5100万円(研修会等の学術活動1310万円、各委員会等の会議費約1190万円、機関誌発行等の広報・出版約1650万円、専門医認定約750万円等)と管理・事務費2400万円(事業委託費約1190万円等)の計約7500万円の予定となりました。

第2回では年会費未納者の取り扱い、公認会計士契約の見直し、新たに税理士との契約、学術集会の会計についての提案を理事会に提出しました。理事会では、4年間の会費未納者64名が規約により自然退会となること、公認会計士が小川正則氏から、紙透大氏に交代すること、新たに税理士として長尾謙太氏と契約すること、学術集会の会計を日本手外科学会の会計に含めることなどが承認されました。

第3回では平成29年10月末での収支状況が事務局より報告されました。収入は順調に推移しており、予算と大差なく達成される見通しです。支出は平成28年度と同様の理由により約2300万円減少する見込みであり、収支としては約1600万円の黒字となる予定です。平成30年度予算案は、学術集会の収支(学術集会開催収入7300万円、学術集会準備費支出200万円、学術集会支出7100万円)が組

み込まれることになったため、収入約1億3250万円、支出約1億4460万円を計上することとなり、日本手外科学会の会計規模は平成29年度までの約2倍となりました。今後は学術集会の収支が日本手外科学会の収支にも反映されることとなりますので、ますます適正な運営が求められることとなります。

財務委員会は今後も健全で正確な財務運営に努めてまいりますので、ご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

教育研修委員会

委員長 **金 谷 耕 平**

平成29年度教育研修委員会のメンバーは前年度と変わらず、担当理事に砂川融先生、委員に射場浩介、大野義幸、坂本相哲、島田賢一、田中克己、中村俊康、村田景一各先生(五十音順)と委員長に金谷耕平で構成されております。

本年度は、当委員会の主たる活動である春期ならびに秋期教育研修会の開催とともに、2年に1度のカダパーワークショップ開催の年となっています。札幌医大で行われるカダパーワークショップが9月7・8日(木・金)の平日開催になったことから、秋期教育研修会を翌9・10日(土・日)に札幌で続けて開催することとなりました。

第23回春期教育研修会は、アステラス製薬株式会社の協力を得て、第60回学術集会の翌日の4月29日(土)に名古屋国際会議場で開催しました。6題の講演を企画し、参加人数は217名でした。第23回秋期教育研修会は、旭化成ファーマ株式会社の協力で、9月9日(土)・10日(日)に北大学友会館フラテホールで開催しました。参加人数は179名で10題の講演と1題のランチョンセミナーを企画しました。

時系列が前後しますが、第3回カダパーワークショップは9月7日(木)・8日(金)の2日間、札幌医大解剖学教室で開催されました。参加者は37名で、関節鏡コースおよび皮弁コースの2グループに分かれ、初日は講義とマイクロフィルの注入、2日目は8時から17時までの実習を行いました。実習後のアンケートではほぼ満足が得られていますが、グループの人数や機材の確保などに改善の余地があると思われるため、今後も委員会で検討していきたいと考えています。講師の各先生、とくに教育研修委員会の諸先生におかれましては、秋期教育研修会と合わせて4日間の長丁場となりました。ご協力いただき誠にありがとうございました。この場を借りて心から御礼申し上げます。

平成30年度は、第24回春期研修会を第61回学術集会の翌日の4月28日(土)に東京で、第24回秋期研修会を9月1日(土)・2日(日)に金沢市で開催する予定です。

教育研修委員会では、できるだけ皆様の意見を取り入れながら、よりよい研修システムの構築に全力を注いでおります。今後ともご支援を宜しくお願い申し上げます。

編集委員会

委員長 谷 口 泰 徳

編集委員会の活動報告をさせていただきます。編集委員会の担当理事は坪川直人です。現編集委員は、池田全良、江尻荘一、岡田貴充、長田伝重、河村健二、佐藤和毅、鈴木克侍、関谷勇人、峠康、長岡正宏、西田圭一郎、西田淳、二村昭元、信田進吾、古川洋志、堀井恵美子、松崎浩徳、松村一、山下優嗣（敬称略）で、各先生方と協力し投稿された論文の査読審査を行っております。

平成29年度の第一回編集委員会を、第60回日本手外科学会学術集会開催期間中の平成29年4月27日に名古屋国際会議場で開催し、各議題について審議を行いました。特筆すべき議題としては、日手会雑誌に掲載された学術集会発表論文を対象に、若手の手外科医の奨励、育成を目的として学会奨励賞の創設について議論しました。その後の理事会の承認により、学会奨励賞の呼称は「田島達也賞、津下健哉賞(50音順)」とし編集委員会で候補者を選び理事会での承認後上位2編に賞を与えることになりました。平成29年9月より、第33巻に掲載された学術集会発表論文から候補者の募集を開始し、論文審査を行いました。編集委員会、理事会の審査承認の結果、第一回の田島達也賞は、九州大学整形外科の小菌直哉先生に、津下健哉賞は平成記念病院整形外科の北條潤也先生に決まり、両先生には平成30年4月の日手会総会で表彰状が授与される予定です。

論文の投稿を容易にするために、論文登録システムの一部を改善しました。これにより論文の新規投稿、再投稿そして修正確認が容易になりました。今後も、オンラインジャーナルの画面を一部変更し、会員の皆様に日手会雑誌への投稿、論文査読などを容易する予定です。

今年度の投稿受付論文数は平成30年1月の時点で、総数250編で、採用233編、不採用8編、審査中9編です。不採用の主な理由は、論理的ではないこと、学術研究論文の体裁をなしていないことです。これらの論文に対しては編集委員から幾度か改訂要請しますが、それでも論文の質が上がらない場合には不採用と判定されます。編集委員からの修正指導には限界がありますので、共同演者の指導医の先生方から投稿前の十分な修正、校正を宜しくお願い致します。本年度の日手会雑誌の34巻オンラインジャーナル公開は、2号：平成29年11月27日、3号：平成29年12月18日、4号：平成30年1月29日と順調に発行され、5号は平成30年2月26日、6号は4月23日頃の発行を予定しております。代議員の先生方に年間2～3編の査読をお願いしておりますが、オンラインジャーナルが予定日に公開されるように引き続き、査読業務を行って頂きますように宜しく願い申し上げます。第61回学術集会発表論文の受付期間は、平成30年6月1日(金)9:00から7月2日(月)15:00と既にホームページに公開しています。会員の皆様からの多くの論文投稿をお待ちしております。

より質の高い日本手外科学会雑誌の発行に向けて編集委員一同、一層の努力をしておりますので、引き続き学会員の皆様には今後ともご支援、ご協力を宜しく願い申し上げます。

機能評価委員会

委員長 長田龍介

機能評価委員会は、担当理事である稲垣克記先生(昭和大学整形外科)のもと、越後歩先生(札幌徳洲会病院リハビリテーション科)、洪淑貴先生(名古屋第一赤十字病院整形外科)、多田薫先生(金沢大学整形外科)、池田純先生(昭和大学横浜市北部病院整形外科)と、委員長の長田龍介(富山大学整形外科)からなる委員で構成され、アドバイザーの中村俊康先生(山王病院整形外科/国際医療福祉大学)のご指導をいただいております。

● 従来事業の報告

日本手外科学会機能評価表についてはDASH (Disability of Arm, Shoulder and Hand)、PRWE (Patient-Rated Wrist Evaluation: The Japanese Version)、HAND20日本語版、およびMHQ (Michigan Hand Questionnaire)日本語版が日手会HPに掲載され、患者立脚型機能評価質問表からダウンロードできるようになっております。第4版と併せてお使いください。またSWM (Semmes-Weinstein Monofilaments) テストの保険収載に伴い、この研修会に関する案内が日手会HPの学会・研究会日本ハンドセラピー学会から閲覧できるようになっております。

● 現在継続中の事業

日手会版再接着肢・指の機能評価を行うにあたり、委員会では切断レベルに応じた評価が望ましいと考えており、機能評価、各種測定法などの手技の標準化を含め、日本ハンドセラピー学会との共同作業として進めることを検討しています。変形性手指関節症の機能評価と分類についても他施設共同研究に向けて準備中です。

国際委員会

委員長 和田卓郎

国際委員会は柿木良介担当理事、稲垣克記アドバイザーのもと、面川庄平、金谷文則、佐藤和毅、建部将広、服部泰典、吉田綾委員、和田卓郎の7名の委員から構成されます。今年度の活動の概要を報告します。

ASSH (米国)、HKSSH (香港)、KSSH (韓国) Travelling Fellowを選出

2018年のJSSH-ASSH Travelling Fellowとして山部英行先生(済生会横浜市東部病院)、田鹿毅先生(群馬大学医学部付属病院)を、JSSH-KSSH Travelling Fellowとして宇佐美聡先生(東京手の外科スポーツ医学研究所高月整形外科病院)、JSSH-HKSSH travelling Fellowとして上原浩介先生(東京大学医学部整形外科)を選出しました。英語でのプレゼンテーションと質疑応答を取り入れた選考も2年目になりました。候補者の業績はみなすばらしく、competitionは厳しくなる一方で、選考に苦慮しました。今後も意欲溢れる若手会員の応募を期待しております。

HKSSH Fellow来日

平成30年4月26、27日に稲垣克記会長のもと東京都で開催される第61回日本手外科学会学術集会には、HKSSH FellowとしてDr. YAU Leung-Kai (Queen Elizabeth Hospital) が来日されます。稲垣会長のご高配により、学術集会ではTravelling Fellow Sessionが設けられ、日本のフェローと共に発表をしていただきます。Fellowは日本各地の施設を見学されますので、ホストの先生にはどうぞよろしく願いいたします。

残念ながら、2018 Bunnell Fellowに選出されたDr Sanji Kakar (Mayo Clinic) は来日されないことになりました。Mayo Clinicで電子カルテのシステムが更新されるため、スタッフの渡航がきびしく制限されるのが理由です。Dr Kakarから大変残念ですとのメールをいただきました。来年以降、何かの機会でJSSHに来ていただけることを期待しております。

第7回日米合同手外科会議

第7回日米合同手外科会議は2020年に日手会が主催で開催されます。第6回会議は2015年3月、ASSHがハワイのマウイ島で主催しました。国際委員会で開催地、日程、プログラム等を検討し、準備を進めます。

広報渉外委員会

委員長 白井久也

平成29年度の広報渉外委員会は、平瀬雄一担当理事、日高典昭 岡崎真人 磯貝典孝 佐竹寛史 辻英樹の各委員と私の計7名で委員会の活動をしてきました。第1回委員会は日手会会期中の平成29年4月に、第2回委員会は9月にWEB会議で、第3回委員会は12月にWEB会議で、第4回委員会は肘学会期間中の平成30年2月に行いました。

日手会ニュース第47号を平成29年3月に発刊、第48号を9月に発刊しました。第48号からは“バトンリレー”と称して重鎮の先生方にエッセイの執筆をお願いし、日手会ニュースがより興味深い読み物になるよう新しい企画を加えました。第1回バトンリレーは山内裕雄先生にご寄稿いただきました。

手外科シリーズの手外科パンフレットは平成28年2月以降からは紙媒体がなくなりホームページからの閲覧となっています。会員外の先生などから手外科シリーズの挿絵を使用したいという問い合わせが時々あります。著作権は日手会にあるため委員会でチェックして転載の許可、非許可をその都度出しています。手外科シリーズは今回新しく、No.30「握り母指」とNo.31「斜指症」が加わりました。現在No.32「手指の骨折」の原稿を作成中です。

日本整形外科学会へのシンポジウム、パネルへの提言を毎年行っています。2019年5月の第92回日整会には先天異常の治療(長期経過観察例)、デュブイトラン拘縮の病態と治療、の2項目に手外科学会から推薦することになりました。

今後も皆様のご理解とご指導の程、よろしく願います。

社会保険等委員会

委員長 亀山 真

社会保険等委員会は池上担当理事以下、岩瀬、大江、島田、高瀬、鳥谷部、光安、森田の7名の委員、および委員長亀山の計9名で活動を行っております。

◆外保連活動

各種委員会に委員を配し活動を行っております。平成30年度要望のために作成した酵素注射療法(ザイヤフレックス)、カスタムメイドガイドを用いた骨切り術および変形治癒骨折矯正術(上腕骨、前腕骨)の試案は、昨年上梓された外保連試案2018に掲載されました。

◆平成30年度診療報酬改訂に向けての活動

次年度改定として①知覚再教育、②酵素注射療法、③カスタムメイドガイドを用いた骨切り術、④カスタムメイドガイドを用いた変形治癒骨折矯正術、⑤手術の通則14の留意事項(4)指に係る同一手術野の範囲アの(ハ)の記述の中の「の「3」指(手、足)」の語句を削除、⑥靭帯性腱鞘内注射を、外保連を通じて厚労省へ医療技術評価提案書を提出しました。また、上記②、③については、厚労省からのヒアリングにおいて要望のための資料を作成し説明を行いました。

◆平成30年度診療報酬改定の近況

今回要望をした技術のうち、①デュピュイトラン拘縮に対するコラーゲナーゼ注入療法(ザイヤフレックス)の増点要望は、2018年2月7日開催の中医協総会で490点から2490点に増点すること(Jコード)が決定しました。さらに手術の通則14の留意事項(4)指に係る同一手術野の範囲アの(ハ)の記述の、「の「3」指(手、足)」の語句は、「同一指内の骨及び関節(中手部・中足部若しくは中手骨・中足骨を含む)」としている語句との整合性を得るため削除する要望も認められました。その他、今回の改定では手外科領域の技術の多くで増点を得ることができました。

◆厚労省保健局医療安全課への訪問

エピネフリン含有キシロカインの指への麻酔は添付文書で禁忌とされていますが、近年の本学会での報告の現状を踏まえ、これを慎重投与に変更する要望を昨年12月に池上担当理事、島田委員、委員長(亀山)で行ってまいりました。今後は学会として実態調査が必要になる見込みですが、現在調査内容についてPMDAで検討していただきその回答を待っている段階にあります。

◆学術集会ランチオンセミナー

昨年と同様、第61回学術集会で亀山(委員長)による講演を予定しております。内容は、平成30年度診療報酬改定の結果、全国整形外科保険審査委員会議(全審会)の討議内容、診療報酬算定上のQ&A、等について講演をさせていただく予定です。今後も会員の皆様に社会保険に関する有益な情報を提供できればと考えております。

先天異常委員会

委員長 橋本一郎

先天異常委員会の主な活動内容は、手の先天異常懇話会の開催、日手会手の先天異常分類マニュアルの再検討、手の先天異常症例相談窓口の運営、「代表的な手外科疾患」新しいパンフレットの作成、などがあります。本委員会活動が先天異常手の診療に少しでも役立つ情報を発信できることを目標にしています。

手の先天異常懇話会

第61回日本手外科学会学術集会の期間中に、稲垣克記会長のご配慮により第56回手の先天異常懇話会を開催する予定です。今回のテーマは「横軸形成障害(短合指症)」に対する手術を中心とした治療法です。東京慈恵会医科大学 形成外科 松浦慎太郎先生には「基礎編」を、南大阪小児リハビリテーション病院 川端秀彦先生には「応用編」を講義していただきます。本懇話会は日本手外科学会と日本整形外科学会の専門医教育研修単位、日本形成外科学会の専門医資格更新単位を申請しております。また、本委員会では「手の先天異常懇話会のあり方」について、出席者へのアンケートを行い、講演内容の難易度や症例検討の必要性、適切な開催時間などを調査して、懇話会が会員にとって魅力的となるために検討を続けています。

日手会手の先天異常分類マニュアルの再検討

日手会手の先天異常分類マニュアル(改訂版2012年)の改訂に向けて、問題点の検討を行う方針といたしました。次回の第56回手の先天異常懇話会において、会員のみなさまからご意見をいただくためにアンケートを実施する予定です。

手の先天異常症例相談窓口の運営

昨年度に日手会ホームページ上で開設された「先天異常症例相談窓口」では、相談症例はまだ少ないですが、症例相談の運営を行っています。

「代表的な手外科疾患」のパンフレットの新規作成

日手会ホームページに掲載されている「代表的な手外科疾患」に「母指多指症」と「強剛母指」の修正版を掲載しました。また、新規に「握り母指症」と「斜指症」のパンフレットを作成し掲載しましたのでご覧ください。

これからもみなさまのご支援とご指導をよろしくお願いいたします。

倫理利益相反委員会

委員長 重 富 充 則

当委員会は、酒井昭典担当理事、塚田敬義アドバイザー、普天間朝上委員、湯川昌広委員、恵木丈委員、深谷和子外部委員、山我美佳外部委員、委員長の私の8人体制で活動しております。本年度は例年通り新規入会希望者の審査、利益相反自己申告書の審査を行いました。

1 入会審査

毎月メール審議を行っています。学術集会時期の4月は毎年30名前後の方が新規入会を申請されますが、それ以外は毎月10名前後の入会希望者の審査を行っております。平成29年1月～12月までの入会希望者は正会員142名、準会員10名、賛助会員1名で、審査の結果、全員承認として理事長に上申しました。

2 利益相反自己申告書の審査

アドバイザー、外部委員の先生方にも参加していただき、利益相反自己申告書の審査を毎年行っております。審査の結果、疑義が生じた場合には疑義の確認を行い、審査結果を理事長に上申しました。

学術研究プロジェクト委員会

委員長 小 野 浩 史

構成

日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会の構成メンバーは、酒井昭典担当理事、仲沢弘明アドバイザー、小野浩史委員長、釜野雅行委員、鈴木茂彦委員、高木誠司委員、村松慶一委員です。

活動内容

1. 平成30年度学術研究プロジェクトの選考

平成29年10月14日にTKP東京駅日本橋カンファレンスセンターにて酒井昭典先生(担当理事)仲沢弘明先生(アドバイザー)鈴木茂彦先生(委員)高木誠司先生(委員)村松慶一先生(委員)小野浩史(委員長)の参加で、平成29年度学術研究プロジェクト選考委員会を開催し平成30年度学術研究プロジェクトの選考を行いました。今年度は、プロジェクト委員会主導の研究テーマである「腱鞘炎」に3題と「切断指」に1題、一般自由研究テーマに1件の応募があり、委員の評価が最も高かった2件が選出されました。委員会主導の研究テーマに関しては、千葉大学大学院整形外科の山崎厚郎先生の「新鮮凍結屍体を用いたばね指に対するA1pullyストレッチの機序解明と理学療法確立」が選出されました。また、一般テーマでは名古屋大学大学院手の外科学の中川泰伸先生の「手指変形性関節症患者に対して用いられる疾患特異的患者立脚型評価票『Functional Index for Hand Osteoarthritis』の日本語版作成及び妥当性・信頼性の確認」が選出されました。さらに今年度は、名古屋大学手の外科の平田仁先生の「デュピュイトラン拘縮患者を対象としたコラゲナーゼ注射治療と腱膜切除術後の上肢機能

及び費用効果の比較研究」が外部資金を導入する研究として承認されました。全プロジェクトが理事会で承認されました。

2. 学術研究プロジェクト進捗状況報告書のチェック

日本手外科学会学術研究プロジェクトに選ばれますと、毎年プロジェクト研究の進捗状況を報告し、プロジェクト終了から1年以内にプロジェクトの結果を日本手外科学会学術集会で発表し、かつ、日手会雑誌もしくは英文雑誌 (impact factorの付与された雑誌を強く薦める) で公表することが義務づけられております。尚、日手会雑誌には、自由投稿論文として発表していただくようお願いしております。研究者からの報告書を委員で分担し、研究の進捗状況、助成金の使途、学会報告、論文報告をチェックしております。平成29年度は、平成25年度選考のプロジェクトの終了時審査と平成26年度および平成27年度選考の3件の進捗状況チェックを行いました。また、すでに終了したプロジェクトで論文が確認できていない研究者に投稿を促すことになりました。

3. 日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会主導の研究テーマ

平成25年度より個人からご提案いただくプロジェクトのみならず、学術研究プロジェクト委員会が研究テーマを提示して、そのテーマに沿った研究プロジェクトの募集をおこなっています。平成30年度プロジェクト委員会主導の研究テーマは、「手の先天異常」と「絞扼性神経障害」の2つとなりました。両テーマに関係するあらゆる研究を対象と致しますので、会員の皆様奮ってご応募ください。よろしく願いいたします。

今後とも、学術研究費の有効利用と手外科研究者のモチベーションの向上につながるプロジェクトの実施を目指し努力いたします。皆様のご指導、ご鞭撻の程お願い申し上げます。

専門医制度委員会

委員長 田中克己

◇委員会構成

本委員会は専門医制度を統括する目的で、他の各種委員会との連携のもとに活動を行っています。

平成29年度の委員会構成メンバーは稲垣克記担当理事、朝戸裕貴委員、加藤博之委員、亀井 譲委員、酒井昭典委員、砂川 融委員、三上容司委員、矢島弘嗣委員と委員長の田中克己です。本委員会は専門医制度の総合的な運営を行うものとして位置づけられております。カリキュラム委員会、専門医資格認定委員会、専門医試験委員会ならびに施設認定委員会の各委員会との連携を取りながら、新専門医制度に向けての制度設計を中心に活動しております。

◇活動内容と今後の方針

平成29年度に日本手外科学会専門医制度にとって大きな動きがありました。日本手外科学会の専門医制度は当初、研修プログラム制としての制度設計を検討しており、そのため認定研修施設の1年

間の手術症例数調査などのご協力をいただきながら進めてまいりました。しかし、専門医機構からの指示では、必ずしも研修プログラム制にこだわる必要はなく、研修カリキュラム制でも可能であるとの通達があり、そのため日本手外科学会としては多方面から検討した結果、従来通りの研修カリキュラム制を基本的な制度とすることが確認・決定されました。現在の日本手外科学会の専門医制度の骨格は変えずに一部の修正を図ることで対応が可能であると考えています。

2018年4月から基本領域学会の新専門医制度が開始します。一方、サブスペシャリティ学会に関しては、日本専門医機構からの専門医制度新整備指針の中に概略としての記載にとどまっています。サブスペシャリティ学会専門医の研修プログラムについては基本領域学会である日本整形外科学会と日本形成外科学会がともに日本手外科学会と協同して、専門医制度を設計運営することになるのですが、具体的事項は明確とはなっていません。おそらく基本領域学会の専門医制度が本格的に始動してからになると考えられますが、機構からの指示がいつ行われても対応が可能になるように準備を行っています。平成29年度には基盤学会である日本整形外科学会ならびに日本形成外科学会と日本手外科学会の三学会の横断的な委員会を発足させ、手外科専門医検討委員会として、実務的な活動を行うこととなりました。

現在の日本手外科学会の専門医制度はすでに良質な制度であることは言うまでもありません。医療全体の変化に伴い、さらに良いものを目指すことが求められています。引き続き広く社会へ貢献できるように、また、手外科医にとっても、より安心した活動ができるような環境を考えてまいります。引き続き会員諸氏のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

専門医資格認定委員会

委員長 中尾悦宏

【委員会概要】

専門医資格認定委員会は、今年度は委員の交代はなく、亀井 譲 担当理事のもと、石河 利之 委員、大泉 尚美 委員、大谷 和裕 委員、加地 良雄 委員、國吉 一樹 委員、児玉 成人 委員、高木 岳彦 委員、鳥山 和宏 委員、野口 政隆 委員、松村 一 委員と委員長の中尾悦宏、11名で活動いたしました。専門医制度や受験資格、更新申請の要件等についての様々な問い合わせに対応し、10月以降、専門医試験受験資格申請、資格更新申請について審査、審議し、また相談医の推薦を行いました。

【活動と審査報告】

早い時期より専門医試験受験や更新の要件、手続きについて多くの質問が事務局に寄せられ、随時回答いたしました。7月25日、ホームページに「第10回手外科専門医試験受験資格認定申請」、「専門医更新申請」について告知を行いました。10月20日までの申請期間に専門医試験受験資格認定には47名の、また専門医資格更新には対象者146名のうち122名の申請がありました。更新対象でありながら手続きを行われなかった24名には専門医継続の意志の有無を書簡で確認し、16名が更新希望で遅れて手続きを行われ、更新辞退7名、猶予希望1名でした。よって更新申請者は138名となりました。

事務局で申請書類をPDF資料とし、11月9日に各委員に郵送し審査を開始しました。結果を事務局でまとめ委員間で共有し、11月28日のweb会議で試験受験資格について審議し、資格認定26名、書類不備や不足、不適切な病歴要約症例の提出や考察不足等を理由に保留20名、不合格1名と判定しました。また12月12日の更新資格についての審議では、資格認定120名、保留18名という結果でした。web会議で保留判定となった申請者には、早急に書類の修正、再作成、不足書類の提出、適切な病歴要約症例への差し替え等を求め、委員で手分けして審査を継続いたしました。これらの手続きを経て、1月6日午後、東京で委員会を開催して慎重に審議し、受験申請では47名中46名において、更新申請では138名全員において資格を満たしていると判定いたしました。また相談医の審査も行い、本年度は1名を選出し理事会に推薦しております。さらに審査過程で課題となったFAQや提出書類記入例の数項目について意見を交わし、一部修正を行う予定です。

昨年度に本委員会の委員を増員したことや、判定保留者に対して書類修正、追加、症例差し替え等の対応期間を長めに設定したことで、試験受験申請、資格更新申請いずれも例年より円滑に審議を進めることが出来ました。しかしながら、初回審議で受験資格審査では4割以上を、更新審査においても1割強の申請を保留扱いにせざるを得ない現状です。質の高い専門医、またその制度の存続のために、より一層丁寧な準備、書類作成をお願いいたします。

最後になりましたが、委員の先生方、そして御協力を賜りました多くの学会員の先生方に心より感謝いたします。引き続きお力添えをよろしくお願いいたします。また事務局の皆さまにはたいへんお世話になっております。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

施設認定委員会

委員長 藤尾 圭 司

平成29年度は委員に変更がありました。委員の尼子雅俊先生が任期終了され、森田哲正先生が着任されました。川勝基久、岸陽子、坂井健介、副島修(敬称略、五十音順)の計5人です。理事長は坪川直人、委員長は藤尾圭司(敬称略)で変更はありません。主な活動は新規と継続の施設認定です。現在は多くの専門医修得希望者が研修しやすいように、できるだけ施設認定を認める方向で努力しています。新規申し込みは随時行っていますが、更新の申し込み期間は例年10月から11月に行っていますのでホームページを参考にしてください。認定作業時期は12月に委員にメールを送って各委員に二重にチェックを行って頂き、委員長、理事で最終確認を行っています。最終的に1月の理事会で承認を得ています。

今年度申請期間における申請数は、新規、更新認定が63件、条件付き認定、大学特例が10件、認定不可が2件、取り消しが6件でした。委員会で議論になったのは認定施設基準の6項からなる定款をどのように解釈するかということでした。

手術件数について大学以外は十分に基準を満たして頂けていますが、例えば研修カリキュラムの不整備、医療安全管理委員会の不整備、手外科の学習会があるかどうか、手外科の十分な診療を行える施設とは?はどう解釈するかという問題でした。今まで専門医を増やすため比較的基準を緩めて

いましたが、認定研修施設とはあくまでも専門医を育てる機関であってその資格自身がステータスではないということからすれば6項目は専門医制度認定研修施設に最低限必要な基準であると考えられます。今回は満たさなかった施設に対しては条件付きで認可しましたが、更新時に繰り返し満たさなかった施設は認定不可としました。また学習会とは医者同士の勉強会を指すのか、作業療法士との勉強会でも認めるのかなど、内容証明を提出して頂く以上、申請時における明確な基準(施設についても最低何が必要なのか)を銘記すべきとの意見が出されました。委員会でいつも議論されることですが、施設認定は病院の機能評価のような格付けではなく、あくまでもqualityの高い専門医を増やすという観点から考えていかなければならないと思われま

専門医試験委員会

委員長 佐野和史

1) 委員会メンバー

専門医試験委員会は加藤博之担当理事、長谷川健二郎アドバイザー、池田和夫委員、清川兼輔委員、小林由香委員、篠原孝明委員、田中利和委員、長尾聡哉委員、南野光彦委員、西田淳委員、福本恵三委員、古川洋志委員と委員長の佐野和史の13名で活動しております。当委員会では年間6回の会議を経て専門医試験問題を作成し、年次専門医試験を実施することを業務としております。

2) 第9回専門医試験を終えて

平成28年度第9回専門医試験は平成29年3月20日(春分の日)に開催しました。受験者数は73名(整形外科64名、形成外科9名)で前年度より24名増加し、委員会メンバーだけでは対応が困難であったため、4名の代議員の方々(有野浩司先生、國吉一樹先生、瀧川宗一郎先生、平瀬雄一先生)に臨時試験員としてご協力頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。第9回専門医試験より、新たに筆答問題が一部分野別選択制(共通問題40題と形成・整形外科学分野別選択問題各4題)となりましたが、大きな混乱もなく終了しました。分野別選択問題は受験者の基盤学会に関わらず選択可能ですが、整形外科分野選択者は63名(うち整形専門医62名、形成専門医1名)、形成分野選択者は10名(うち整形専門医2名、形成専門医8名)で、殆どの受験者が自らの基盤学会と同じ分野を選択していました。試験結果は、平均点78.9点、合格率97%と例年に比べ平均点、合格率ともに向上し、受験者にとって選択問題制導入は有利に働いたと思われま

3) 第10回専門医試験にむけて

① 過去3年分の公開問題の疑義洗い出し作業

現在、ホームページ上で過去3年分の試験問題(2008~2010年度(第1~3回))が閲覧可能となっています。しかし問題作成から最長10年が経過しており、疫学、病態、治療法などにおいて現在の認識とそぐわない設問および選択肢が存在する可能性があるため、この度、委員全員で分担し全公開問題から疑義問題の洗い出しを行いました。抽出した疑義問題をさらに当委員会で合議し、不適切

と判断したものをホームページ上に掲載しました。この先も同様の疑義が確認された場合は、ホームページ上で随時通知する予定です。

② 第10回専門医試験開催

平成29年度第10回専門医試験は例年同様に平成30年3月21日(春分の日)にステーションコンファレンス東京で開催となります。今回の受験者は46名の予定ですので、当委員会メンバーと日手会事務局員で対応可能と思われまます。

昨年より筆答問題は一部分野別選択制となりましたが、当委員会では、各々の基盤学会を軸とした専門性の高い選択問題を作成する一方で、共通問題の中で手外科診療に携わる形成外科医と整形外科医が共有すべき知識をしっかりと確認できる問題作りを行く所存です。

カリキュラム委員会

委員長 加地良雄

1. 構成員

カリキュラム委員会では平成29年4月に構成員の変更があり、長田伝重委員長、森友寿夫委員、岩崎倫政アドバイザーが退任され、大井宏之新委員、坂野裕昭新委員が新たに就任されました。また、長田伝重委員長には新たにアドバイザーに就任頂きました。これにより現在、田中克己担当理事、長田伝重新アドバイザーのもと、吉本信也委員、石河利広委員、松田健委員、大井宏之新委員、坂野裕昭新委員、加地良雄新委員長の6名の委員で活動を行っています。

2. 活動内容

平成29年4月の学術集会開催時に委員会を開催しました、それ以外ではメール会議で主に教育研修講演申請の審査を行っています。平成29年2月から平成30年1月の間に288件の申請がありましたが、その全てを認定とし、今年度は非認定となった申請はありませんでした。

3. 教育研修講演申請に関するお願い

今年度は非認定となった申請はありませんでしたが、演題名のみでは手外科との関連を判定できない申請が多々見受けられました。その場合、申請者に抄録の提出を求めたり、手外科との関連性に関して説明を求めたりするなどして対応しましたが、審議が煩雑になったり、認定までに時間が掛かってしまう事例がありました。現在のところ手外科との関連性を示して頂ければ認定する方針としていますが、迅速な認定のためにも、演題名に手外科との関連がわかる文言をあらかじめ含めるようご配慮をお願い致します。

情報システム委員会

委員長 西 浦 康 正

担当理事：池上博泰、委員長：西浦康正、委員：稲垣克記、加藤博之、亀井譲、酒井昭典、砂川融、田中克己、坪川直人、平瀬雄一、三上 容司、矢島 弘嗣、陪席者：(京葉コンピューターサービス (KCS)) 並木英徳、藤原 智洋出席で、平成30年1月6日委員会を行いました。報告事項として、第60回日手会学術集会での日整会カードの使用が予定通り行われたこと、第61回日手会学術集会においても、同様の方法で日整会カードの使用が行われる(クレジットカード決済機能が追加される)こと、日整会の新システムが稼働し、関連学会との連携に関しても開始されることが報告されました。日手会の専門医制度の方向性がある程度確定したことから、日手会の会員管理システムの再構築について、審議しました。KCSの並木氏から、新システムを開発しKCSと事務局の二元管理を解消してデータベースを一本化すること、e医学会と契約してHands Nowのコンテンツを動画配信したいとの提案がありました。日整会カードを使用するため、日整会との連携に関しては医籍登録番号の登録が必須となるが、KCSからは、間違いを避けるため、新システムのマイページから医籍登録番号とe-mailアドレスの登録を会員が個々に行うことが提案されました。医籍登録番号の管理は日手会として必須なので、正会員の入会申込書に医籍登録番号を記入する欄を設けること、現在の正会員から医籍登録番号を収集するため、4月の学術集会でアナウンスを行うほか、日手会ホームページへの掲載や会員への一斉メール配信で告知することになりました。日形会との連携に関しては、日形会がカードシステムを導入し、昨年12月のマイクロ学会で講習会の電子登録の運用テストを行ったことが報告され、以前と状況が変わっていることから、日形会カードの使用について再度確認することになりました。旧Hands Nowのコンテンツは出来上がっているのに関わらず公開されていない件に関し、e医学会加入とは切り離し、KCSからストリーミング配信の見積を取って金額が妥当であれば至急配信を開始することになりました。システムの再構築に関しては、KCSの提案では運用費が高いため、KCSから運用費の内訳の詳細、コングレから新システム導入による事務局費用削減額を提示してもらい、3月25日開催予定の第2回委員会で検討することになりました。

用語委員会

委員長 後 藤 渉

平成29年度の利用語委員会は、任期満了を迎えた根本充委員に渡邊健太郎アドバイザーに代わるアドバイザーとして残留していただき、新たに鳥谷部荘八委員を迎え、残留の加藤博之理事、越智健介、加藤直樹、牧信哉、湯川昌広、後藤の計8名で活動しています。

1年前のこの場で報告したように用語委員会では数多くのタスクを抱えていますが、この1年は手外科用語集と整形外科用語集との整合性をとる作業・日本整形外科学会用語集に採用してほしい手外科関連用語を提案する作業を優先的に行ない、ほぼこの作業に時間が費やされました。ようやくもう少しで作業は終了する予定です。

現在、手外科用語集はweb上で検索可能ですが、掲載用語に関する疑義、ご意見等も「用語集に関するQ & A」として、web上で自由にお寄せ頂けるシステムにしております。用語委員会では、お寄せ頂いた用語に関する要望の検討も随時行っています。前項の整形外科学用語集との整合性をとった結果と合わせ、ある程度の修正点がまとまった所で修正版をHP会員専用ページにアップすることになると思います。まだまだ修正要望は少ないので、是非会員の皆様からの御指摘をお待ちしております。

Web 登録委員会

委員長 田尻 康人

Web登録委員会は、専門医資格申請・更新、症例登録等をWeb上で行うことを目的に編成された委員会です。

平成29年度の委員会活動

当初は基盤学会の新専門医制度ならびに症例登録システムの整備にあわせて、これと連携した手外科の専門研修システムの構築を目指していましたが、専門医機構よりサブスペシャリティ領域の専門研修制度自体のあり方が緩和されたため、現在まで本委員会の活動は休止しております。

今後の活動方針

上記経過により、廃止。

定款等検討委員会

担当理事 柿木 良介

定款等検討委員会は、ほぼ理事長直属のご指導のもと、活動いたしております。最近の活動内容は下記の通りです。

1. 日本手外科学会代議員に定年性を採用

昨年度より、他学会の動向を鑑み、日本手外科学会代議員にも定年性を導入いたしました。日本手外科学会代議員の被選挙人となるためには、会員のうち、就任の年の4月1日現在、年齢満65歳未満のものに限りこれを有すると言う項目を日本手外科学会代議員選挙細則に追加いたしました。

2. 国際手外科学会連合日本支部・アジア太平洋手外科学会連合日本支部会員の新たな獲得

日本手外科学会は、現在アメリカ手外科学会、香港手外科学会、韓国手外科学会とexchange traveling fellowshipを運営しています。また来年からは、新たに台湾手外科学会ともexchange traveling fellowshipを開設する予定です。またシンガポール手外科学会ともtraveling fellowshipを検討中です。この国際化のなかで、日本手外科学会としましては、出来るだけ多くのひとに、国際手外科学会連合日本支部・アジア太平洋手外科学会連合日本支部会員になって頂きたいと考えておりま

す。そこでまず、専門医には必ず、国際手外科学会連合日本支部・アジア太平洋手外科学会連合日本支部会員になって頂きたいと考えており、現在規則化にむけて検討しております。

今後の定款等検討委員会の活動に関しましては、皆様の忌憚のないご意見と温かいご協力をお願い申し上げます。

オンラインジャーナル別冊運用委員会

委員長 平田 仁

オンラインマガジンHandNow創刊のお知らせ

学会が果たすべき役割はさまざまあるが、情報発信は最優先で取り組むべきミッションであり、そのための投資を惜しんではならない。日本手外科学会の情報発信は当初商業誌「整形外科」を間借りして始まったが、1984年に「日本手外科学会雑誌」を創刊し、以来毎年6号をコンスタントに発行して日本手外科学会会員だけではなく、大学病院の附属図書館などを通じて国内の医師全般に手外科に関わる最新情報を惜しみなく届けてきた。さらに、コンピュータの急速な進化と普及、そしてインターネットの発達により始まった「第3次産業革命」の波に乗り2010年には日本手外科学会雑誌をオンライン化し、ネットワーク環境が存在すれば時と場所を選ばずに全ての記事に容易にアクセスできる仕組みへと進化を遂げた。第3次産業革命ではインターネット空間に蓄積された情報をベースに「根拠に基づく医療 EBM」が勃興し、瞬く間に医療界を席卷した。この流れのなかで学会としては旧来尊重してきた大家の経験ではなく、統計に裏付けられた確かな情報を発信することを求められるようになった。更に2010年以降には人工知能の社会実装が始まり、並行してネット空間は指数関数的に拡大し、通信環境も急速に進歩したことよりネット空間に溢れる情報が文字ベースから画像ベースへと急激に変化した。このような流れを受けて日本手外科学会ではEBM関連情報や大容量の画像データをシームレスに発信するツールとしてオンラインマガジン「HandNow」を創刊することが2014年に決定され、別冊運用委員会が組織され、また、実際に編集を担当する junior editor と editorial writer が、主に次世代を担う55歳未満の会員から選抜された。2015年には三菱商事が提供するe医学会というオンライン情報サービスの一角を借りてHandNowを運用することが理事会で承認され、防衛大学校教授根本孝一先生が会長を務めて京王プラザホテルで開催された第58回日本手外科学会では準備した創刊号を学会期間中に限って全会員に仮公開し、大きな反響も得た。HandNowの最大の特徴として「日本整形外科学会の会員情報システムとの連携を前提としていること」が挙げられる。現在日本整形外科学会では専門医教育を目的とした情報発信の新たな仕組み作りが進められているが、HandNowではアクセスコントロールの仕組みを日本整形外科学会と共通化することで、手外科学会員だけでなく、広く日本整形外科学会会員、そして日本形成外科学会会員が情報にアクセスできる。これにより上肢障害の治療に関わる全ての医師に質の高い情報をシームレスに届ける仕組みが整った。しかし、会員管理システムを日整会と共有化するとの思惑がその後大きな障壁となった。会員管理を請け負う京葉コンピュータサービスと日整会との協議が最終段階で難航し、妥結するまでに2年もの期間を要した。幸い昨年本格的な運用が始まり、いよいよHandNowを発信する環

境が整った。2月17日には創刊号発刊に向けた準備が別冊運用委員会で話し合われ、創刊号を第61回学術集會に併せて発信することが正式に決まった。会員の皆様には関西・中部地区のjunior editorとeditorial writerが創意工夫を凝らして編集した創刊号を学会の合間にお楽しみいただきたい。

医療機器開発・管理運用委員会

委員長 岩崎 倫政

前身の人工手関節運用委員会では新規人工手関節(DARTS人工手関節)実施に関するガイドライン(以下に記載)の策定と運用を行ってきた。これらの経験と実績を生かし、今後、手外科領域全般の医療機器開発と運用管理を行う目的で名称が医療機器開発・運用管理委員会に変更された。担当理事は池上博泰先生、委員長は岩崎、委員は稲垣克記先生、岩本卓士先生、酒井昭典先生、森谷浩治先生の計6名で構成されている。

2017年6月からのDARTS人工手関節使用開始後、販売後成績調査のための実施症例の登録管理、実施者基準のひとつである講習会の主催および受講証の交付を行ってきた。2017年度は、4回の講習会を計画し、既に3回は終了(2017年9月2日 東京、9月3日 大阪、11月19日 札幌)し、2018年2月18日に東京にて4回目の実施を予定している。2018年度も、DARTS人工手関節に関する本年度と同様の活動を行う予定である。加えて、上述したように他の医療機器の開発およびその管理運営に対するサポートも積極的に実施していく考えである。

実施ガイドライン

1. 適応基準

- ① 原則として保存的治療に抵抗する関節リウマチまたはその類縁疾患手関節
- ② 原則として50歳以上
- ③ Larsen 分類grade IV～V の患者、III においては人工手関節以外の手術で著しい可動域の低下や不安定性の出現等が予想される患者

2. 除外基準

- ① 基礎疾患に対するコントロールが著しく不良な患者
- ② 人工手関節再置換の患者
- ③ 神経病性関節症の診断を受けた患者
- ④ 手関節内部または周囲に感染症がある、若しくは潜在的感染の疑いがある患者
- ⑤ 精神・神経疾患を有し、医師の指導を守れないと考えられる患者
- ⑥ 医師の指導による後療法が実施できないと考えられる患者
- ⑦ 骨量が極めて少なく強固な固定が見込めない患者や、筋肉、腱の再建が困難で機能の回復が見込めない患者
- ⑧ 骨セメントの使用に伴う血圧低下、ショック、肺塞栓等の重篤な副作用の既往のある患者
- ⑨ 活動性の高い症例、重労働に従事している患者

⑩ 歩行時等に手術側で杖などを使用し手関節に過度のストレスがかかる患者

3. 実施者および施設基準

- ① 手外科学会専門医
- ② RA手関節を含む手関節疾患に対する標準的な手術経験がある
- ③ 後に定める手術手技講習会もしくはe-learningを受講したもの
- ④ 人工関節登録制度の施設IDを取得している施設

手外科専門医検討委員会

委員長 田中克己

◇委員会発足の経緯

本委員会は平成29年度に新たに設置された委員会です。本年4月から施行される新専門医制度において基本領域である日本整形外科学会(以下、日整会)と日本形成外科学会(以下、日形会)の研修プログラムは明確にされています。しかし、日本手外科学会(以下、日手会)をはじめとしたサブスペシャリティ学会専門医の研修プログラムに関しては具体的な明示はなく、整備指針の中に『(前略)関連する基本領域学会はサブスペシャリティ学会とで構築する検討委員会(仮称)において、専門医研修内容を調整し、基本領域学会がサブスペシャリティ学会と協同して、専門医制度を設計運営する。(後略)』とあり、日手会理事長から日整会ならびに日形会の両理事長に検討委員会の設置と委員の推薦を依頼し、日手会専門医制度委員会委員と両学会からの委員により手外科専門医検討委員会が発足し、日手会の新専門医制度の構築に取り掛かることとなりました。

◇委員会構成

委員は日本手外科学会専門医制度委員会から朝戸裕貴委員、稲垣克記委員、加藤博之委員、亀井讓委員、酒井昭典委員、砂川融委員、三上容司委員、矢島弘嗣委員と私、田中克己が入り、また、日整会から池上博泰委員、原田繁委員、日形会から島田賢一委員、鈴木茂彦委員により構成されています。本委員会は三学会の横断的な委員会であるため担当理事は置かず、田中が委員長として取りまとめと他の関係委員会との調整を図ることとなりました。

◇活動内容と今後の方針

日本手外科学会の専門医制度は従来通りの研修カリキュラム制を基本的な制度とすることが確認・決定されております。したがって現在の専門医制度の骨格は変えずに一部の修正を行うことで対応が可能であると考えています。具体的にはサブスペシャリティ学会専攻医の研修開始時期に始まり、研修期間内の単位の取得時期・内容・単位数など検討項目は多数あります。そのためにも両基盤学会との綿密な連携を行い、さらに良質で、有益な制度となるように検討をしてまいります。

専門医育成とともに専門医の維持・更新においても本委員会の役割はたいへん重要なものと考えております。引き続き会員諸氏のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

代議員選挙管理委員会

委員長 清水隆昌

このたび定款に従い、第3回目の代議員選挙が行われましたので報告いたします。今回の選挙管理委員会は、前回同様12名の委員で構成されました。北海道・東北地区から西田欽也先生(手稲溪仁会病院)、入船秀仁先生(札幌医科大学)、関東地区から小平聡先生(埼玉手外科研究所)、工藤俊哉先生(順天堂浦安病院)、中部地区から林正徳先生(信州大学)、倉橋俊和先生(安城厚生病院)、近畿地区から長尾由理先生(京都桂病院)、清水隆昌(奈良県立医科大学)、中国・四国地区から児玉祥先生(広島大学)、山下優嗣先生(山陰労災病院)九州・沖縄地区山中芳亮先生(産業医科大学)、大安剛裕先生(宮崎江南病院)が選出されました。

平成29年9月14日に第1回選挙管理委員会Web会議が行われました。本学会理事長の矢島弘嗣先生がオブザーバーとして参加され、事務局から中尾和宏様、前田陽子様にご参加いただきました。はじめに選挙管理委員長の選任、代議員選挙告示事項の確認と、地区ごとの有権者名簿の確認が行われました。前回の選挙を元に作成した告知文書と立候補届、加えて今回から新たに必要とされる推薦状の原案を確認しました。審議の結果、立候補者の自薦については認めない旨を告知に明記すること、選挙は地区毎に行うため、告知後に定数の入れ替えは不可能であることが確認されました。

前回同様、平成29年10月1日～31日までの約1か月間の間に立候補届出を受け付け、その後平成29年11月15日まで立候補辞退届を受け付けました。

平成29年11月17日に第2回選挙管理委員会Web会議が行われ、地区別代議員立候補状況の確認、代議員選挙立候補者公示文書の検討を行いました。北海道・東北地区で27名、関東地区で79名、中部地区で40名、近畿地区で44名、中国四国地区で27名、九州・沖縄地区で31名の各地域の定数に対して、関東地区、中部地区、中国・四国地区で定数を超える立候補者がありましたが、辞退届が出された結果、11月15日時点では各地区とも定数と同人数の立候補者数となりました。最終的に、代議員定数248名に対して立候補者数248名と定数内におさまることが確認され、立候補者は選挙をすることなく全員が当選することに確定しました。

この場を借りて代議員選挙が滞りなく行えたことを報告し、会員の皆様のご協力に深謝いたします。

役員選挙管理委員会

委員長 内山茂晴

役員選挙管理委員会は平成29年9月19日(火) Web会議室にて開催された。出席者は委員/伊原公一郎先生(国立病院機構関門医療センター)、小島康宣先生(奈良県立医科大)、鳥谷部荘八先生(仙台医療センター)、西浦康正先生(筑波大学附属病院土浦市地域臨床教育センター)、村瀬剛先生(大阪大)、と内山茂晴(信州大学、現在岡谷市民病院)であった。

審議内容：

1. 役員選挙ならびに選挙管理委員会について

事務局から、来年の任期満了にともない役員選挙が実施されることを説明した。

2. 委員の互選で、内山茂晴が委員長となることが決定した。

3. 役員選挙告示(9月30日掲載)確認

事務局が前回はベースに案を作成した役員選挙告示文、推薦状、立候補届について確認作業を行った。推薦状、立候補届は原案通りで承認された。

4. 役員選挙スケジュール確認

今後以下のスケジュールで実施していくことが確認された。

- 1) 平成29年9月29日(土) 選挙に関する告知
- 2) 平成30年3月1日～20日 立候補届出(委員会宛)
- 3) ~3月31日(土) 立候補届け辞退受付
- 4) 4月9日(月) 立候補者氏名を代議員に通知
- 5) 4月25日(水) 選挙(定時総会当日)

5. その他

次回会議は、役員選挙が行われることになった場合は4月上旬(Web会議)開催予定とし、行われなくなった場合は立候補状況をメールで確認することとなった。

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第61回日本手外科学会学術集会◆

会 期：平成30年4月26日(木)～27日(金)
会 場：京王プラザホテル
会 長：稲垣 克記(昭和大学医学部整形外科学講座)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/jssh2018/>

.....

◆第56回手の先天異常懇話会◆

会 期：平成30年4月27日(金) 16時10分～17時10分
会 場：京王プラザホテル
主 管：日本手外科学会 先天異常委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/congenital/index.html>

.....

◆第24回春期教育研修会◆

会 期：平成30年4月28日(土)
会 場：京王プラザホテル 南館5F「エミネンス」
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

.....

◆第24回秋期教育研修会◆

会 期：平成30年9月1日(土)～2日(日)
会 場：金沢商工会議所会館
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

関連学会・研究会のお知らせ

◆第61回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：平成30年4月11日(水)～13日(金)
会 場：ホテルニューオータニ博多・電気ビル 共創館
会 長：清川 兼輔(久留米大学医学部形成外科・顎顔面外科学講座)
詳 細：<http://www.c-linkage.co.jp/jsprs61/index.html>

.....

◆第30回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：平成30年4月28日(土)～29日(日)
会 場：ソラシティカンファレンスセンター
会 長：斎藤 和夫(瀨野辺総合病院)リハビリテーション室
詳 細：<http://meeting30.jhts-web.org/>

.....

◆第91回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：平成30年5月24日(木)～27日(日)
会 場：神戸コンベンションセンター(神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場)
会 長：遠藤 直人(新潟大学大学院医歯学総合研究科機能再建医学講座 整形外科学分野)
詳 細：<http://www.joa2018.jp>

.....

◆第31回日本臨床整形外科学会学術集会◆

会 期：平成30年7月15日(日)～16日(月・祝)
会 場：城山観光ホテル
会 長：橋口 兼久(鹿児島県整形外科医会会長/橋口整形外科)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/31jcoa/>

.....

◆第29回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：平成30年9月7日(金)～8日(土)
会 場：海峡メッセ下関
会 長：神田 隆(山口大学大学院神経内科学)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/jpns29/>

.....

◆第27回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成30年10月18日(木)～19日(金)
会 場：京王プラザホテル
会 長：仲沢 弘明(日本大学医学部形成外科学系形成外科学分野)
詳 細：<http://procomu.jp/jsprs2018/>

◆第33回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成30年10月11日(木)～12日(金)
会 場：奈良春日野国際フォーラム 麓～I・RA・KA～、東大寺総合文化センター
会 長：田中 康仁(奈良県立医科大学整形外科学教室)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/joar2018/>

.....

◆第45回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：平成30年12月6日(木)～7日(金)
会 場：大阪国際交流センター
会 長：五谷 寛之(大阪掖済会病院手外科・外傷マイクロセンター)
詳 細：<http://jsrm44.umin.jp/>

.....

◆第29回日本小児整形外科学会◆

会 期：平成30年12月14日(金)～15日(土)
会 場：ウインクあいち(愛知県産業労働センター)
会 長：和田 郁雄(名古屋市立大学大学院リハビリテーション医学分野)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/jpoa2018/>

.....

◆第33回東日本手外科研究会◆

会 期：平成31年2月2日(土)
会 場：朱鷺メッセ
会 長：坪川 直人(新潟手の外科研究所)
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/ejhand/index.html>

.....

◆第31回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：平成31年2月8日(金)～9日(土)
会 場：グランドパーク小樽
会 長：和田 卓郎(済生会小樽病院 整形外科)
詳 細：<http://convention-w.jp/elbow2019/index.html>

.....

◆第24回日本形成外科手術手技学会◆

会 期：平成31年2月23日(土)
会 場：パシフィコ横浜
会 長：前川 二郎(横浜市立大学形成外科)

教育研修講演

※取得単位や各問合せ先など詳細は日本手外科学会ホームページの[教育研修講演]をご覧ください。

<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/infomation/ICL/ICL.html>

平成30年3月31日時点

◆ちっと手をみる会◆

日 時：平成30年4月4日(水) 19:00～21:00

代表者：麻生 邦一

会 場：大分レンブラントホテル

演題名：リウマチ手の再建と後療法

演者名：河村 誠一

◆第61回日本形成外科学会総会・学術集会◆

日 時：平成30年4月13日(金) 13:20～14:20

代表者：清川 兼輔

会 場：ホテルニューオータニ博多 4階 鶴の間東中

演題名：Development of a Regenerative Peripheral Nerve Interfaces for Motor Control and Sensory Feedback of Neuroprosthetic Devices

演者名：Paul S. Cederna

◆第130回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会◆

日 時：平成30年4月20日(金) 15:10～16:10

代表者：三浦 裕正

会 場：ひめぎんホール

演題名：手の腱鞘炎

演者名：大井 宏之

◆第16回手外科懇話会◆

日 時：平成30年4月25日(水) 20:00～21:10

代表者：佐藤 和毅

会 場：エーザイ株式会社東京コミュニケーションオフィス

演題名：手外科疾患に対する対外衝撃波治療

演者名：國吉 一樹

◆第5回手の造形手術研究会◆

日 時：平成30年4月27日（金） 17:30～19:30

代 表 者：五 谷 寛 之

会 場：京王プラザホテル

演題名1：手指のPIP関節に対する自他動運動可能な牽引型創外固定器の開発—生理学的な手指運動の解析を基にした新しい創外固定器—

演者名1：五 谷 寛 之

演題名2：牽引型創外固定器を使用した肋骨助軟骨移植によるPIP関節形成術

演者名2：佐藤 和毅

◆音楽家の手懇話会◆

日 時：平成30年4月27日（金） 18:30～19:30

代 表 者：酒 井 直 隆

会 場：京王プラザホテル

演題名1：音楽家の手の障害：概要と演奏動作

演者名1：酒 井 直 隆

演題名2：音楽家の手に起こりやすいジストニー：余計なところに力が入る病気

演者名2：長谷川 修

◆一般社団法人日本手外科学会 第24回春期教育研修会◆

日 時：平成30年4月28日（土） 8:30～16:00

代 表 者：砂 川 融

会 場：京王プラザホテル エミネンス

プログラム：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/file/spring24th.pdf>

◆第25回鶴舞手外科セミナー◆

日 時：平成30年5月10日（木） 18:30～20:30

代 表 者：平 田 仁

会 場：メルパルク名古屋 3階シリウス

演題名1：手外科医と共有したい医療安全業務の全体像

演者名1：長尾 能雅

演題名2：神経移行術による全型腕神経叢損傷の治療—疼痛管理を含めて—

演者名2：齋藤 貴徳

◆第91回日本整形外科学会学術総会◆

代表者：遠藤 直人

会場：神戸コンベンションセンター（神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場）

日時 1：5月25日（金） 9:35～10:35

演題名1：手外科診療—最近の知見とピットフォール—

演者名1：金谷 文則

日時 2：5月25日（金） 12:30～13:40

演題名2：ランチョンセミナー：手部複合損傷の治療

演者名2：土田 芳彦

日時 3：5月26日（土） 8:00～9:00

演題名3：手指屈筋腱損傷新鮮例とその続発症に対する治療

演者名3：森谷 浩治

日時 4：5月26日（土） 9:15～10:15

演題名4：Optimizing the functional and esthetic result in toe-to-hand transplantations

演者名4：Fu-Chan Wei

日時 5：5月26日（土） 15:45～16:45

演題名5：末梢神経疾患の診断と治療

演者名5：平田 仁

日時 6：5月27日（日） 9:15～10:15

演題名6：手関節再建術の適応と有効性

演者名6：岩崎 倫政

.....

◆第16回Shinshu Orthopaedic Seminar◆

日時：平成30年6月8日（金） 18:15～20:30

代表者：加藤 博之

会場：アルピコプラザホテル

演題名：小児と成人の肘関節障害の診断と治療

演者名：稲垣 克記

.....

◆第119回関西形成外科学会◆

日時：平成30年7月8日（日） 12:00～13:00

代表者：荒田 順

会場：大阪大学中の島センター

演題名：女性疾患としての手指の痛み—私の手はなぜ痛いのか、しびれるのか

演者名：平瀬 雄一

編 集 後 記

今回日手会ニュース第49号の編集を担当しました。内容はJSSH-ASSH Travelling fellow報告記を気鋭の御二方の先生に、シリーズ手外科温故知新IVを上羽康夫先生、第2回手外科バトンリレーを矢部裕先生の大ベテラン御二方にそれぞれ御執筆して頂きました。また第3回カダバーワークショップ参加記を新鋭の御二方の先生に御執筆して頂きました。さらに「第61回日手会学術集会開催にあたって」「委員会報告」と大変内容深い紙面に仕上がったと思います。皆様に深く感謝御礼申し上げます。

先の2月に開催された平昌五輪も、新鋭、気鋭、そしてベテランの日本選手の活躍により、大変盛り上がった大会となりました。2年後の東京五輪も様々な世代の選手の躍動がより大会を盛り上げることでしょう。学会も同じなのかな、と思いながら次の50号にバトンを引き継ぎたいと思います。

(文責：辻 英樹)

広報渉外委員会

(担当理事：平瀬雄一，委員長：白井久也，委員：磯貝典孝，岡崎真人，佐竹寛史，辻 英樹，日高典昭)